

紀要

地震考古学の発展に向けて濱 修(1)

滋賀県竜王町堤ヶ谷遺跡出土の土偶形容器と石器について
.....中村 健二(8)

弥生時代前期～中期の土器観察覚え書き
—針江浜遺跡と長命寺湖底遺跡の弥生土器—.....小竹森直子(14)

古代近江における職能漁民の動向
—松原内湖遺跡出土の刺網系漁網錘の分析から—.....大沼 芳幸(21)

滋賀県大津市国分所在礎石「へそ石」の周辺
.....小松 葉子(31)

近江国野洲・甲賀郡境をめぐる一考察
—大山川流域の条里地割を手がかりとして—.....辻川 哲朗(44)

天井川の生い立ちを考える その3
—天井川と埋没河川との関係について—.....重田 勉(52)

比良山系の山寺
—大津市歓喜寺遺跡について—.....小林 祐季(57)

明治山と旅順
—乃木希典を求める人々—.....松室 孝樹(60)

25

滋賀県大津市国分所在礎石「へそ石」の周辺

小 松 葉 子

1. はじめに

滋賀県大津市国分二丁目地先には謎の巨石がある。中心に出柄を彫りだす特異な形態から「へそ石」と呼ばれ（以下1号へそ石）、あまりの巨大さが奏功してか、今も失われずに住宅地内に体を横たえ半分埋没している。

この石についての最古の記録は、『近江輿地志略』（寒川1734）である。滋賀郡国分村の項に、「国分寺の遺址」として「今田圃の中に昔の寶塔ありしところとて大なる礎存在せり」と記載された石に相当するものと思う。狭い村内にこれ以外に大塔の礎を彷彿とさせる規模の礎石が存在したとは考えがたいからである。

この場所に隣接して「洞（ほら）神社」「洞の前」などの呼称があったことから、当地を淳仁天皇・考謙上皇ゆかりの保良宮の故地とする口碑があった。しかし、付近は狭隘な谷田地形で、宮室を営むような場所ではない。保良宮比定地は北方の石山・膳所周辺に求められるべきとして、近年では、これは宮殿礎石ではなく寺院礎石であると漠然と考えられている。

だが、それがいつの時代の、どのような寺院の所要礎石として製作されたか、なぜこの場所にあるのかという問いに対しては、回答へのアプローチはなされず、いわば手付かずのまま謎としてながく放置されてきた。小論では、可能な限り具体的にこの謎に迫り、礎石から当地の古代史の一端を復元することを目的としたい。

2. 「へそ石」の製作現場

(1) 1号へそ石

昭和8年（1933）撮影の写真（図5-5）を見ても、当石はすでに半分が地中に埋没している。全体がどのような形で残存しているかは不明で、半欠の不完全品、未完成品などである可能性も否定できない。現状では石長160cm、高さは124cm以上を測り、石端部まで利用して、直径140cm以上（復元推定147cm）、高さ10cmの円柱座を造り出している。その中央に径約30cm・残存高3cmの出柄がある（図5-1）。

摩滅により不明瞭となっているが、柱座立ち上がり部分にはノミ連打法とみられる斜方向の工具痕が、柱座部分にはノミ小叩き技法とみられる細かい打痕が観察できる（和田2006）。柱座表面は平滑で、雨水の排水のためか、中心から石端に向かって緩やかに凸カーブを描く。熟達した専門工人の手によるものと推察する。石材は石英斑岩である。円柱座および柄の規模からみて、塔心礎として製作されたものと考ええる。

(2) 2号へそ石

1号へそ石が残る国分二丁目団地の、すぐ北に隣接する標高270mの低山は国分山と呼ばれる。ここには近現代まで石工が入山して採石・加工していた。現在も山中には破断面も真新しい剥片が大量に見うけられる。かつては水晶が採れたらしく、地主は水晶山とも呼んでいる。

筆者は、この山中で古代に遡ると見られる出柄を持つ礎石（以下2号へそ石）を発見した。1号へそ石がこの山から切り出されたものではないかとの推測は以前から巷間にのぼっていたことではあったが、この発見により国分山が古代からの石材採集地であり、かつ製作場でもある可能性が一気に高まった。

2号へそ石は1号へそ石から直線距離にして約120m離れた国分山山中にある（図2）。山裾から旧洞神社境内を抜けて比高差11mを上がった標高200mのやせ尾根の突端に位置する。簡易GPS計測器の測定によれば、北緯34°57′45″、東経135°53′11″付近である。この尾根への登攀途上に採石加工場と思われる平坦面が2箇所ある。大形の石英斑岩が露頭し、剥片が散乱するとともに、矢穴をうがたれた岩石もみられる。だが、礎石には母岩から切り出して採取した痕跡はないから、これらの平坦面は後世のものであろう。ただ、古代においても作事のための平坦な地形は必要だったはずで、礎石周辺ではこの2箇所と洞神社境内地に平坦面がみられる。

礎石の下部はほとんど埋没していて様相は不明である。また、石の周りには掘り込みなどの痕跡はない。形状は長軸165cm×短軸160cmの不正方形で、材質は石英斑岩である。ほぼ中央に径32cm、高さ2cmの出柄を造り出している（図1-1・2）。円柱座は見られないが、製作しようとするれば最大径約125cmのサイズが可能である。残存柄径は1号へそ石とほぼ等しく、当石も心礎級の礎石を製作しようとしていた可能性もある。

ただし、柄高が低いことに加え、旧滋賀郡一帯では円柱座+出柄の形式しか分布していないので、おそらくまだ彫り進めるつもりの未製品と考える。そうであれば、石材採取と粗造りの段階を知るための稀有な例といえる。

表面は一見して平滑である。残る凸凹はほとんど工具によるものかと思われるが単位は明瞭でない。また2箇所ほど工具を連打したかのような筋状の打痕が見られるが全体に展開するものではないようだ。柄の立ち上がり部分には、浅いが幅約2cmの工具を縦に打ち込んだ痕跡が明瞭に残る（図1-3・4）。それはノミ叩き技法と呼ばれているものに近い（和田2006）。

希望の形を造り出すに当たっての線引きのような印は見

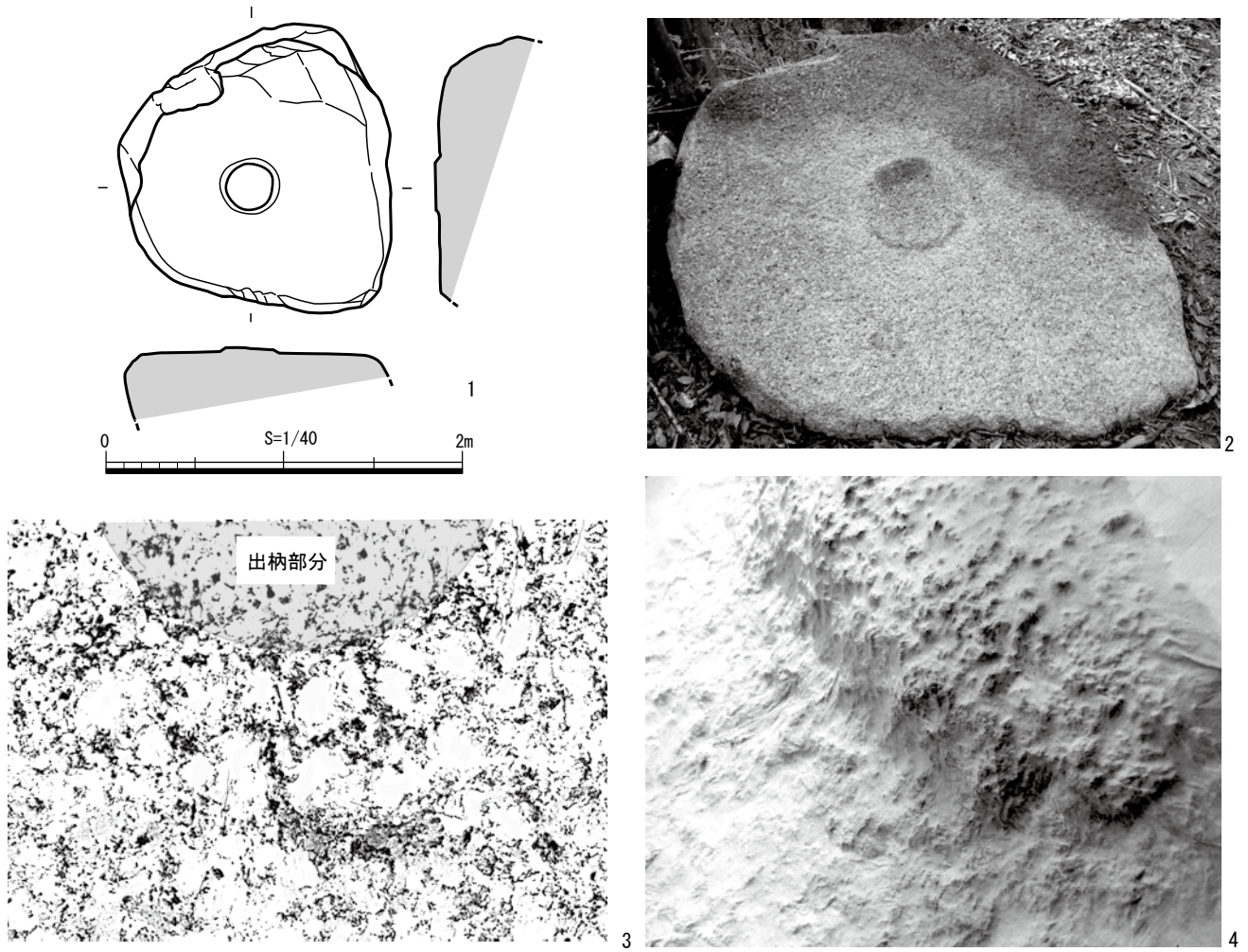


図1 2号へそ石平面図と工具痕

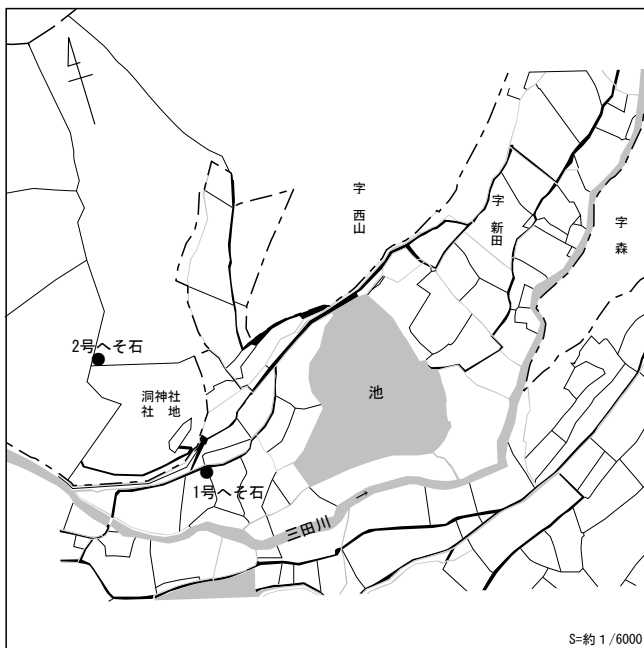


図2 明治地籍図と礎石位置

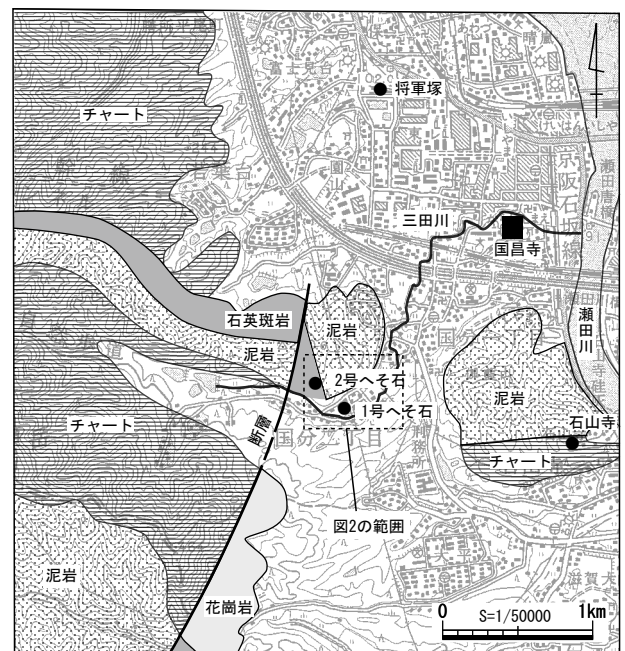


図3 国分山周辺表層地質図

うけられない。石全体を少しずつ叩き削り、時間をかけて柄を表出していったものである。粗造りの段階と呼ぶにはあまりにも丁寧な仕事との印象を持つ。

さて、国分山は主として泥岩で構成されていて、厚さ数cmのチャートと薄い泥岩が互層をなし、しかも褶曲しているため礎石などへの加工には不向きだという⁽¹⁾。その泥岩岩脈の中に東西長さ3km、幅250mと、南北長さ500m、幅150mのL字状に接続する2本の石英斑岩脈が通っている（図3）。石英斑岩は花崗岩よりさらに硬質で、永年利用の礎石の素材として最適であるが、半面、加工に多大の労力を要する。にもかかわらず、むしろ周到にその素材を探索し、厳選して使用に供したものと考える。集中的に石材を得られ、しかも運搬に便利な地域は非常に限られており、表層から知られるのは、15km四方ではこの岩脈が唯一のものである。2号へそ石はピンポイントでその中に入っている。

現在、塊石は主に谷に露頭している。礎石のような重量物をわざわざ谷から尾根に引き上げて加工するとは考えがたいから、原石はさらに上方の尾根から引き降ろしてきたものか、もともとこの場にあった石を使用したかのいずれかであろう。礎石の周辺の転石には加工は全く見うけられず、単独で発見された。

前述のように、2号へそ石から1号へそ石のある平野までは距離にして約120m、比高差11mの急斜面を運搬せねばならない。破損のリスクを考えると、1号へそ石のある標高189m付近まで原石を降ろして、そこで加工するほうが安全である。しかし、そのリスクを考えず、山上で加工を施している。あるいは仕上げ段階まで山中で行い、平地へ降ろす時は完成品に近かったかもしれない。彼らは硬質の石材を加工する技術に習熟していたし、近江国には稀有な形式の礎石発注を受け、素材の探査から始まり、作業工程にのっとって作事を行ない、生産現場からの運搬を行った。さらに、寺院造営現場においては、建物に合わせて礎石の最終的な仕上げが要求されるなど、他分野の技術者と協業する必要があった（上原2006）。ここには、少人数の

石工が自ら寄って石材を採取・加工したものではなく、編成された石工集団と呼ぶべき存在がかいま見えるのではないだろうか。

3. 1号へそ石とは何か

1号へそ石はその巨大さから見て寺院塔心礎であるのは確実と考える。本章では、完成品に近いと思われる当石を取り上げ、この礎石を使用するはずだった某寺院の輪郭を復元したい。

（1）1号へそ石とその供給先

表3は諸国の円柱座と出柵造り出しの塔心礎を持つ寺院（Aグループ）を、表4は出柵のみの造り出しを持つ寺院（Bグループ）を集成したものである。Aグループを円柱座径のサイズ順に並べてみると（表1）、一見して1号へそ石の巨大さに驚く。東大寺は別格としても、南都七大寺である大安寺（推定七重塔）と同規模、西大寺（推定五重塔）と元興寺（五重塔）を凌駕する。また遠江をのぞく諸国国分寺、恭仁宮大極殿を施入した山城国分寺金堂礎石、すなわち先般復元された平城宮第一次大極殿礎石や有力氏族の氏寺の礎石なども寄せ付けない規模である。五重塔はむろん、七重塔心礎と考えても全く違和感はない。

A・Bグループ全35寺院のうち5ヶ寺が大寺、半数を越す18ヶ寺が国分寺である。心礎の形式は不明ながら、他の主要建物礎石に円柱座・出柵形式を採用する寺院（Cグループ）（表5）も含めると国分寺例はさらに増す。これらの国分寺も塔心礎は同じ形式を採用していたのではない。つまり、1号へそ石の供給先を考える時、某寺は一氏族の氏寺にとどまるものではなく、定額寺以上、国分寺などの官寺クラスであったのではないかと推定する。

（2）1号へそ石の製作時期

① 諸国の円柱座・出柵形式塔心礎

表3・4により、諸国の塔心礎の製作時期を見ると、以下のように概括できる。

来歴が文献で追跡できる南都の大寺は、本薬師寺西塔（天

表1 円柱座径からみた寺院

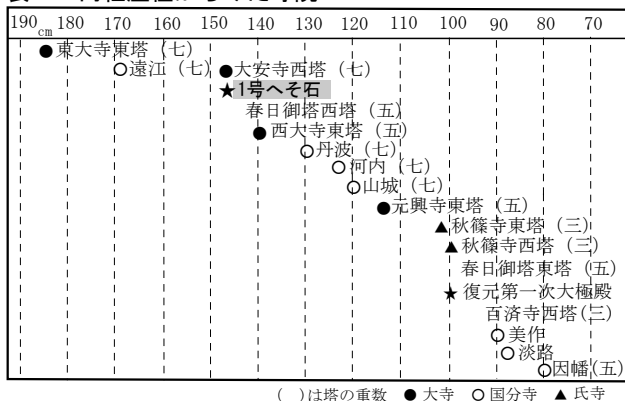


表2 諸国国分寺塔心礎形式

畿内				東海道									
山城	河内	和泉	摂津	伊賀	伊勢	志摩	尾張	三河	遠江	駿河	伊豆	甲斐	相模
☉	☉						■		☉			☐	☐
北陸道				東山道									
武蔵	安房	上総	下総	常陸	近江	美濃	飛騨	信濃	上野	下野	陸奥	出羽	若狭
☐		■		☐	自然石	■	☐		■	☐	☐	☐	■
北陸道				山陰道									
越前	加賀	能登	越中	越後	佐渡	丹波	丹後	但馬	因幡	伯耆	出雲	石見	隠岐
		☐			☐	☉		☉?	☉	○	○		
山陽道				南海道									
播磨	美作	備前	備中	備後	安芸	周防	長門	紀伊	淡路	阿波	讃岐	伊予	土佐
■	☉		○		☐		○	■	☉	☐		■	☐
西海道													
筑前	筑後	肥前	肥後	豊前	豊後	日向	大隅	薩摩	沓波	対馬	多羅		
☐			☐	☐	■			☐					

☉ 円柱座・出柵 ■ 出柵 ○ 塔以外に当該形式を採用
☐ さまざまな形状の凹穴孔を持つ ☐ 未発見・亡失・上部構造物ありなど

表 3. 円柱座・出枘形式塔心礎を持つ寺院（Aグループ）

旧国名	寺院名	心礎（単位はcm）			心礎以外の塔礎石	塔一辺長 (尺)	復元塔	時期	塔以外の伽藍礎石	文献
		長径×短径	円柱座径×高さ	柄径×高さ	原位置					
大和	東大寺東塔	170×188以上	185	99×29	×	54?	七重	752～753着手	焼門・転害門：円柱座出枘	2 10
	大安寺西塔	250×220	147×12	欠損40痕跡	○		七重	747以降767完成か	僧房：円柱座のみ	10 34
	元興寺東塔	200×188	114×11	33×5	○	33?	五重	749～757着手	講堂：円柱座のみ	10 34
	西大寺東塔	180×160	130～140八角形	39×	○	28	五重	770以降		10 18
	秋篠寺西塔	140×140	100×11	21×9	×		三重	780創立	金堂：自然石	10 19
	秋篠寺東塔	177×98	102～98楕円形	18×8	○					
	春日御塔西塔	180×180	145～140×11	欠損40痕跡	○	約29	五重	12世紀南都旧寺の礎石転用		10 35
	春日御塔東塔	180×150	100	亡失	×	32	七重		金堂：円柱座のみ	3
	山城国分寺	224×190	160と120二重柱座	36×14	○	34	七重			
	河内国分寺	316×145	123×7.4二重圓縁	38×9	○		七重	8世紀中葉		8
河内	百済寺西塔	100×100	95×9	28×6	○	約19	三重	8世紀後葉	南門・中門・東塔・回廊：円柱座出枘	27
	遠江国分寺	220×200	169×9	欠損45痕跡	○	32	七重	8世紀中葉	金堂：自然石	3 30
	丹波国分寺	270×250	130痕跡	欠損50痕跡	○	31	七重	8世紀中葉	僧坊：自然石	5
	但馬国分寺	215×115	欠損?	亡失	不明	33	七重	8世紀中葉		5
	因幡国分寺	250×160	80	28×2	×	29	五重	8世紀中葉		5
	美作国分寺	336×135	90×3	27×	×			8世紀中葉	講堂：自然石	5
	淡路国分寺	210×210	88×1.3	30×4	○	24?	三重か五重	8世紀後半		6

表 4. 出枘のみの塔心礎を持つ寺院（Bグループ）

旧国名	寺院名	心礎（単位はcm）			心礎以外の塔礎石	塔一辺長 (尺)	復元塔	時期	塔以外の伽藍礎石	文献
		長径×短径	円柱座径×高さ	柄径×高さ	原位置					
大和	本業師寺西塔	210×210		38×10	○	24	三重	730平城東塔以降		20 25
	尾張国分寺	185×160		亡失35痕跡	○	27?	五重?	8世紀後半～末	移転	8
	上総国分寺	210×210		48×12	○	36?	七重	8世紀中葉		3 29
	近江国分寺	200×170		亡失48痕跡	○	30	五重	8世紀中葉	金堂講堂：自然石	4 22
	美濃国分寺	320×238		64×12	○	36	七重	8世紀中葉	金堂講堂：自然石	8
	上野国分寺	330×166		欠損66痕跡	○	36	七重?	8世紀中葉	金堂身舎は円柱座あり	4
	若狹国分寺	170×120		欠損27痕跡	×	27		8世紀中葉	非瓦葺き	8
	播磨国分寺	183×144		27×6	○	31	七重?	8世紀中葉		8
	紀伊国分寺	150×120		60×5	○	31	七重	8世紀中葉	金堂：加工なし	6
	伊予国分寺	255×182		欠損60痕跡	○	34	七重	8世紀中葉	回廊：円柱座のみ	6
河内	豊後国分寺	200×150		60×11	○	36	七重	8世紀中葉		7 1
	駿河国分寺	150×150		27×17	×	24	五重	奈良時代後半?	駿河郡衙へ1km	10 12
	田辺麿寺西塔	110×100		23×3	○	15	三重	7世紀末	南門：自然石 東塔側柱礎：出枘	23
	黒山麿寺	160×140		35×6	×			白鳳～鎌倉		21
	坂中麿寺	160×140		37×10	×			8世紀後半～9世紀	会見郡衙に隣接	24
	美作江見麿寺	200×150		50×3	×			白鳳～平安初頭	英多郡衙へ400m	17 26
	三河医王寺陸寺	191×135		59×10	×			7世紀末～8世紀前半		9 28
	山城馬場南遺跡	85×65		21×3	○	6		730代～760前後		33

文献番号は次頁一覧に対応

表 5 塔以外の伽藍礎石に円柱座・出枿を持つ寺院（Oグループ）

旧国名	寺院名	礎石位置と概要		原位置	時期	文献
伯耆	伯耆国分寺	塔址南側に集積されている礎石中に出枿（径32cm）持つものの1個あり		×		
出雲	出雲国分寺	伝金堂礎石として13個が分散している。円柱座（径78～69cm）出枿（径33～30cm）		×	8世紀中葉	5
備中	備中国分寺	全て原位置を動いているが出枿（径30～46cm）を持つ。推定講堂礎石		×	8世紀中葉	5
	備中国分尼寺	金堂に円柱座（径約72cm）出枿地覆座つき礎石が23個残存。講堂に残存する2個は出枿のみあり		○	8世紀後半	5
但馬	但馬国分尼寺	残存2個中1は径73cmの円柱座、径18cmの出枿を持つ。他の1個は円柱座のみ上部に竈あり		？		1
長門	長門国分寺	伝金堂の2個があるが原位置を動いている。円柱座（径90～102cm）出枿（30cm）		×	8世紀中葉	8
山城	井手寺	推定講堂跡の近辺に6個が集められている。うち2個に円柱座（径56と62cm）出枿（20と23cm） 3個は円柱座のみ、1個は加工なし 橘諸兄建立伝承を持つ橘氏の氏寺		×	8世紀中葉	31
	東寺	金堂：40個中35個に円柱座（径約100cm）＋出枿あり 他は円柱座のみ 講堂：44個中30個に円柱座（径約90cm）＋出枿あり 他は円柱座のみ		○	8世紀末～ 9世紀初頭	13 16
	西寺	講堂該当区に残る3個中2に円柱座（径84・83cm）出枿（24cm）、他は円柱座（径82cm）のみ 東僧坊残存2個中1も円柱座（径80cm）・出枿（径15cm）		×	8世紀末～ 9世紀初頭	14 15
	唐招提寺	金堂：36個全てに円柱座・出枿。講堂：44個中に柱座や出枿の有るもの無いものが混在		○	781年以降	36 37
近江	梵釈寺	金堂内陣北東隅と南東隅の2個に円柱座（径72と80cm）、出枿（径23と30cm）		○？	8世紀末	32

文献

1 堀井三友（1956）『国分寺址之研究』堀井三友遺著刊行委員会

2 角田文衛編（1986）『新修 国分寺の研究 第1巻 東大寺と法華寺』吉川弘文館

3 角田文衛編（1991）『新修 国分寺の研究 第2巻 畿内と東海道』吉川弘文館

4 角田文衛編（1991）『新修 国分寺の研究 第3巻 東山道と北陸道』吉川弘文館

5 角田文衛編（1987）『新修 国分寺の研究 第4巻 山陰道と山陽道』吉川弘文館

6 角田文衛編（1987）『新修 国分寺の研究 第5巻上 南海道』吉川弘文館

7 角田文衛編（1997）『新修 国分寺の研究 第5巻下 西海道』吉川弘文館

8 角田文衛編（1997）『新修 国分寺の研究 第7巻 補遺』吉川弘文館

9 小堀栄三（1989）『幻の塔を求めて西東 古代寺院跡の一研究』

10 岩井隆次（1982）『日本の木造塔跡 心礎集成とその分析』株式会社雄山閣

11 白鳳文化研究会（2008）『葉師寺白鳳伽藍の謎を解く』富山房インターナショナル

12 静岡県教育委員会（2003）『静岡県文化財調査報告書第57集 静岡県の古代寺院・官衙遺跡』

13 京都府文化財（1954）『重要文化財 教王護国寺講堂修理工事報告書』

14 鳥羽離宮調査研究所（1977）『史跡 西寺跡』

15 京都市埋蔵文化財研究所（2007）『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007～4』

16 川勝政太郎（1931）『創建時の東寺および西寺』『史迹と美術』185 史迹・美術同政会

17 湊哲夫・亀田修一（2006）『吉備の古代寺院』吉備人出版

18 浅野清（1966）『西大寺東西両塔の発掘』『仏教芸術』62 毎日出版社

19 石田茂作（1987）『仏教考古学論攷 4 仏塔編』思文閣出版

20 中央公論美術出版（1984）「葉師寺東塔」『日本建築史基礎資料集成十一 塔婆1』

21 大阪府近つ飛鳥博物館（2007）『大阪府立近つ飛鳥博物館図録 44 河内古代寺院巡礼』

22 滋賀県教育委員会（1967）『史跡紫雲寺宮跡保存施設事業報告書』

23 春日神社（1973）『田邊廃寺発掘調査』

24 鳥取県立博物館（2003）『鳥取県立博物館所蔵 古代寺院関係資料集』

25 花谷浩（1997）「本葉師寺の発掘調査」『仏教芸術』235 毎日新聞社

26 津山市郷土博物館（1992）『津山郷土博物館特別展図録 第5冊 美作の白鳳寺院』

27 大阪府（1934）『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告書 第4輯』

28 愛知県史編纂委員会（2010）『愛知県史 資料編 4 飛鳥～平安』

29 須田勉（1998）「上総国分僧寺跡」『千葉県の歴史 資料編考古3』千葉県

30 大林組プロジェクトチーム（2002）『よみがえる古代大建設時代—巨大建物を復元する—』東京書籍

31 京都府立山城郷土資料館（2010）『展示図録 31 平城の北・恭仁宮—木津川流域の奈良時代—』

32 林博通（1989）「崇福寺跡」『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会

33 京都府埋蔵文化財調査研究センター（2011）『天平人の華と祈り—謎の神雄寺—』柳原出版

34 棚井敏雄（2003）「創建東大寺伽藍の基本計画について」『ザ・グレイトブッド・シンボジウム論集1号』東大寺

35 奈良国立博物館（1982）『春日西塔・東塔跡の発掘—殿下の御塔・院の御塔』

36 奈良県文化財保存事務所（2009）『国宝 唐招提寺金堂修理工事報告書[本編1]』

37 奈良県教育委員会（1972）『国宝 唐招提寺講堂他二棟修理工事報告書』

— 35 —

平2年<730> 平城薬師寺東塔建設開始以降）（花谷1997）、大安寺（天平19年<747> 塔院以外完成～神護景雲1年<767>塔院完成か）、元興寺（天平勝宝年間<749～757>着手）、東大寺（天平勝宝4～5年<752～753> 西塔完成東塔着手）（櫻井2003）から西大寺東塔（宝亀元年<770> 塔礎石を置く）（宮本1983）、秋篠寺東西塔（宝亀11年<780> 建立）（岩井1982）までにこの形式心礎を持つ塔建立が集中する。

また、国分寺は国分寺建立詔（天平13年<741>）以降、諸国の事情に応じて主要伽藍を建立したはずで、塔だけを抽出して実年代を知るのは困難である。いずれにせよ8世紀中葉から、遅れても後半には、各国ともおおむね主要伽藍の整備が完了していたらしい。礎石の形態は伽藍設計や部材の発注段階から決定していただろうから、その製作も上記の時期を大きく外れることはないと思われる。

一方、各地の有力氏族の氏寺と思われる寺院は、採集資料の年代観から白鳳期創建とされるものが多いが、個々の伽藍建立時期や修造時期に関する諸相はまったくわかっていないといつてよい。唯一、河内田辺廃寺は発掘調査が行われており、西塔の建立時期は7世紀末とされる。これは出柵形式心礎を採用する塔としては今のところ全国最古例となる。しかし、同じ形式の側柱礎が使用されている東塔は、建設時期が大きく遅れると報告されるなど（春日神社1973）、この心礎を白鳳期にさかのぼる最古例としてよいかどうかはなお明確ではない。

当該礎石を採用する最終段階の寺院は、管見にふれる限りでは、平安京遷都後の教王護国寺（以下東寺）講堂（天長2年<825>）である（京都府教育庁文化財保護課1954）。同寺金堂（弘仁4年頃<813>）にも同じ形式の礎石が用いられている。両伽藍ともに円柱座と出柵を造り出した礎石と、円柱座のみで出柵を持たない礎石が規則性なく混在している。様相が東寺ほど明瞭ではないが、西寺でも講堂該当地に円柱座・出柵造り出しの礎石が2点残されており、おそらく平安京遷都同時、8世紀末に、円柱座・出柵形式の礎石を使用しての二寺建立計画があったものと考えられる。

このほか平安京外には、白鳳期に建立され、奈良・平安期の修造瓦が出土する古代寺院もあるが、比定地は市街地化しており、具体相はほとんど不明である（京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課2010）。この後、9世紀に定額寺に指定される寺院にも心礎が出柵形式のものは発見されてない（古代学協会・古代学研究所1994）。現存する塔を見ると、平安前期、9世紀半ば過ぎの建立とされる大和室生寺の塔心礎は上面をならした自然石（奈良県教育委員会1979）である。ただ、平安中期（天曆5年<951>）建立の山城醍醐寺塔心礎は円柱座を持ち、心柱を差し込む大孔をうがっている（浜島1984）ので、平安期になっても若干数は心礎への加工が残るのであろう。しかし、出柵形式を採用する寺院の確実な例は、今のところ東寺・

西寺以降に見出すことができない。

表3・4を見ると、その寺院の多くが8世紀中葉～後半期に集中して主要伽藍を整備しており、当該形式礎石の盛期はそこにある。そして心礎の形式は不明ながら、その他の伽藍に当該礎石を使用する例が8世紀末から9世紀初頭にかけて少数存続し、以後は加工のない自然石利用が多くなっていくものと推定される。

では、近江国ではどうだろうか。これまでのところ、円柱座・出柵を持つ塔心礎は1号へそ石以外見つかっていない。だが、塔以外に目を移すと金堂礎石に当該形式を持つ寺院がある。大津市滋賀里の山中に残る推定梵釈寺である。

② 梵釈寺の金堂礎石

梵釈寺は延暦5年（786）桓武天皇勅願で近江国滋賀郡に造立が開始された。その所在地に関しては長く論争が続いたが、大津市滋賀里山中に展開する白鳳寺院＝推定崇福寺の南尾根にある廃寺が有力候補地とされ（福山1941・田中1941）、その後、採集された土器の検討からも、その説が補強されて現在にいたっている（梶原2002）。

急峻な山稜に、1700㎡にわたって平坦地を造成し、その西寄りに、桁行き・梁行きともに柱間3mを測る5間×4間の南面する金堂、5間×4間南面庇の講堂、3間×2間の推定経蔵などが造られている。金堂の中央3間×2間が内陣である。この南東・北東コーナーの2礎石だけに円柱座・出柵造り出し形式を使用している。金堂の他の礎石は円柱座を造り出すのみで、その径は69～79cm、楕円形を呈するものなどもあり、製品にばらつきがある。講堂礎石は1例のみ出柵をもつが、他は自然石である。石材はすべて石英斑岩である。比叡山周辺では唯一の石英斑岩脈がごく近接して南北に通っているので、そこから採石されたものであろう。

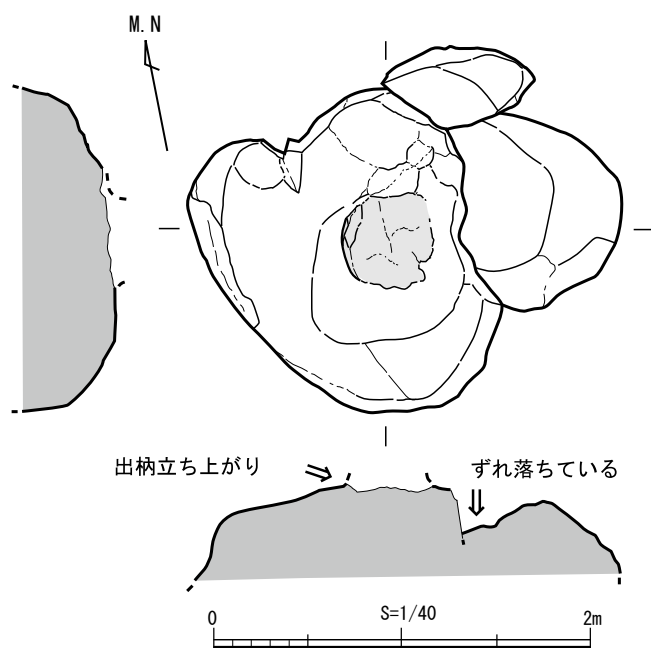
修造に関する履歴は不明で、礎石が創建時の原位置を保つと仮定すると、天皇勅願の官寺礎石でこのように一貫性を欠くことをいささか不審に感じる。礎石に対する均一性への指向は薄く、寄せ集めてでもスピード重視で造営を急がせたのではないかと考えておきたい。同様のことは東寺のような大伽藍金堂でも見られる現象である。

このように梵釈寺例は8世紀第IV四半期の円柱座・出柵形式礎石の稀有な県内事例である。遷都直後の延暦年間を通じて建立された官寺は東西両寺と梵釈寺のみで、その3寺院すべてに当該礎石を使用している。

では、近江国でのこの礎石の出現は786年を待たなければならぬのだろうか。全国的に盛行する8世紀中葉から後半期の官寺に痕跡を探すとすれば、それは近江国分寺がその第一候補となろう。

③ 第一次近江国分寺（甲賀寺）の心礎

近江国分寺の比定地に関してはさまざまな議論があった⁽²⁾が、国分寺建立詔に呼応した第一次国分寺に関しては、甲賀市信楽町の丘陵に今も残る東大寺式伽藍配置の廃寺＝



出納立ち上がり痕跡

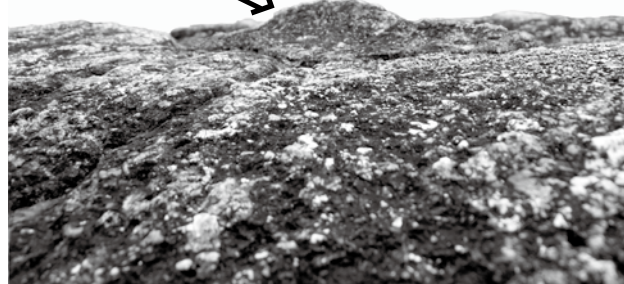


図4 近江国分寺塔心礎

通称甲賀寺をあてる点で、ほぼ見解の一致をみていると理解している。

甲賀寺は、天平17年（745）聖武天皇平城遷都後、盧舎那大仏の造願、すなわち金堂相当部分の建設計画が頓挫してから遠からぬ時期に周辺伽藍の造営も中止したと考えられる。あるいは、他の主要伽藍の建設は全く本格化していなかった可能性もある（畑中2004）。

他方、現在残る廃寺は、中門・金堂・塔院・講堂・三面僧坊・鐘楼・経蔵・食堂礎石を完備する。これらは便宜上、甲賀寺と呼称されているが、実は律令国家的寺院から近江国分寺へと計画変更後、おそらく近江国府が主体となって造営した寺院の完成した姿と考える方が自然である。計画変更時期は天平19年（747）から天平勝宝3年（751）の間であるという（栄原2010b）。以上の理解にしたがって、現在、甲賀市信楽町内裏野に残る廃寺を、ここでは（第一次）近江国分寺と呼ぶ。

現在、塔址には心礎を含む17礎石が完存している。塔基壇は昭和25年の発掘調査により、下層一辺18.3m、上層一辺16.2m、各基壇高0.3mの二重基壇と想定された。塔一辺長は10尺等間で30尺の推定五重塔とされ、火災により焼失した後、掃除することなく廃絶に帰したと考えられている（滋賀県教育委員会1967）。

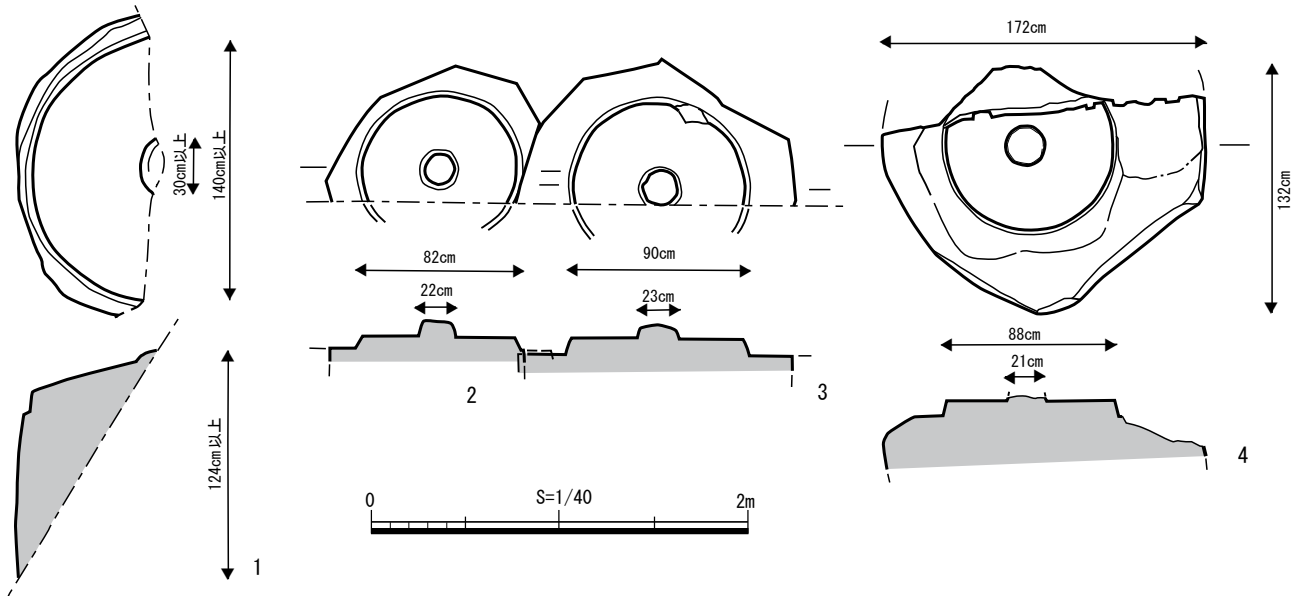
心礎は「特別に人工は加えられていない」（水野1968、35頁）、「本遺構（甲賀寺 筆者註）の礎石はいずれも花崗岩の自然石を用いている」（林1989、353頁）、「心礎も自然石で人の手は加えられていない」（小笠原2005、68頁）と述べられており、自然石という見解が一般的である。

ところで、表2は全国の国分寺（含島分寺）塔心礎形式を分類したものである。心礎の加工は凸凹に二大別できる。

凹はさらに細分されるが、ここでは考察の外とする。空欄は後世削平を受けたり、上部に建造物が建ったり、亡失して抜き取り痕のみを残すもの、塔自体が未発見のものなどを含む。以上の不明分をのぞく、奈良時代に建立される国分寺のうち、心礎に一切加工を施さない「自然石」を使用するものは全国にただ1カ寺しかない。それが近江国分寺なのである。不審というしかない。

しかし、研究史を紐解いてみると、堀井三友は「心柱礎の如きも割目が入っているが、仔細に検討すると上面に径3尺6寸の繰出しに、中央に径1尺6寸の造出しがかすかに見える」と述べている（堀井1956、145頁）し、石田茂作も出願式と仮称する第六類に「近江信楽廃寺」を含めている（石田1977、210頁）。このように古くは心礎が出願形式であるとの認識があった。これを受け、筆者は当該心礎の略測調査を実施した。その結果、被熱・風化・剥離の進行で痕跡が不明瞭になってはいるが、堀井・石田両氏の観察のごとく、近江国分寺の心礎には出願を有していたのではないかと結論にいたった。以下、その概要を述べる。

塔礎石のうち、側柱礎の四隅の礎石は心礎について巨大である。石材は全て花崗岩で、全石被熱により赤変・剥離・破碎している。心礎も罹火して、現状では3片に割れているが、復元すると長径200cm×短径170cmの巨岩となる。その中心に出願が欠損剥離したと見られる円形の割れ痕が残る（図4）。この割れ痕の西端にごく短い2cm程の柄の立ち上がりが確認できる。すでに柄円周に沿ってヒビが入っており、いつ剥離してもおかしくない危うさである。復元すると出願径は約48cmとなり、堀井報告の1尺6寸に合致する。堀井のいう円柱座造り出しは確認できないが、最小でも約120cmの平滑なフラット面があり、柱座にあたると



5



6



7



8

図5 1号へそ石と西方寺伝来礎石ほか

表6 滋賀県内の出ホヅ礎石一覧

名称	図版	位置	長径×短径	円柱座径×高さ	出納径×高さ	石材	所在地	推定郡郷名
1号へそ石	図5-1		159×79以上	140以上×10	30以上×3	石英斑岩	大津市国分二丁目	滋賀郡古市郷
西方寺伝来礎石	図5-2	鐘楼石組み	113×72以上	82×6	22×10	石英斑岩	大津市北大路	
	図5-3	鐘楼石組み	148×77以上	90×9	23×7	石英斑岩		
	図5-4	外庭	172×132	88×12	21×3以上	石英斑岩		
	図5-6	内庭	110×94	70×2	亡失	黒雲母花崗岩		
北大路墓地	図5-7	亡失	不明	72×3	9	不明	大津市国分二丁目	
	図5-8	棺台石の下部	不明	約90	不明	黒雲母花崗岩		
2号へそ石	図1		147×147以上	なし	35×2	石英斑岩	大津市国分二丁目	滋賀郡錦部郷
「將軍塚」	図8		165×110	80×10	19×3.5	石英斑岩	大津市美崎町	
梵釈寺		金堂内陣北東	128×95以上	72	23	石英斑岩	大津市滋賀里	
		金堂内陣南東	101以上	80	30	石英斑岩		
(第一次) 国分寺	図4	塔心礎	200×170	なし	48×2以上	黒雲母花崗岩	甲賀市信楽町	甲賀郡

思われる。

金堂・講堂などの主要伽藍では自然石が用いられており、上面の加工もなく、フラットにさえしていないものが多い。

ただ、塔側柱礎の中に円柱座の痕跡かと思われる形跡を残すものがある⁽³⁾。つまり、礎石加工は皆無だったとはいえない可能性もある。前述した梵釈寺と同様の統一性のなさ、あるものは加工し、あるものは自然石のままで一つの堂塔を建立するという無規律な礎石の使用傾向がうかがわれる。ここでも、効率重視で伽藍の建ち上げが優先された結果と見ておきたい。

このように、近江国においての出柄を持つ心礎形式の出現は、8世紀中葉の近江国分寺塔にあると思われる。そうであれば、地域的には聖武天皇ゆかりの宗教的聖地＝紫香樂を選び、時期的には権勢を誇った藤原仲麻呂の国守時代に建立計画があったにもかかわらず、諸国国分寺中で近江だけがなぜ後出形式の自然石塔心礎なのか、という疑念は解消される。しかし、その後の約40年間、当国ではこの形式礎石は断絶し、次の採用は官寺―梵釈寺の建立を待たなければならなかった。1号へそ石を必要とした某寺院は、この約40年間に前後する時期に塔建立計画を持っていた可能性が高い。

（3） 1号へそ石と西方寺伝来礎石

1号へそ石からわずか40mのところを瀬田川に向かって流れ込む、三田（さんだ）川と呼ばれる小河川がある。石材採取場である国分山からいったん平野に下ろされた礎石は、そのまま直近のこの川を利用して運漕されたものと推察する。水量をコントロールさえすれば最小の労力で重量物を、ものの数時間で河口付近まで運搬できるという利便性があるからである。

へそ石の所在地から、この三田川を下ること距離にしてわずか1.7km、大津市北大路西方寺には、1号へそ石と同素材・同形式の礎石が3点伝来している（図5-2・3・4・6）⁽⁴⁾。この礎石群は、西方寺の南方250mの国分台地上の北大路集落の墓地付近（現大津市光が丘町）から移設されたとの所伝をもつ。現在は亡失しているが、昭和13年には更にもう1点の円柱座・出柄形式礎石がこの墓地に放置されているという報告があるし（柴田1938）（図5-7）、不確実例ながら、今も墓地の棺台置き石の土台として、径約90cm、高さ16cmの円柱座状の造り出しを持つ石が埋設されている（図5-8）。おそらく、江戸期になって村の墓地が確定し、西方寺が葬儀を担当するようになった際に一帯の礎石を寺に移管したものであろう。後述するように、この墓地は、後に国分寺となる定額国昌寺比定地に隣接しており、寺域内である可能性もある。川は国分台地の北を巻くように流れ、急崖を降りる台地下までは約10mの比高差があるため、川を越えて北方に伽藍の展開を想定するには無理があろう。すなわち、三田川が国昌寺伽藍域北端を限

ると見られ（図6）、川を回漕して製作地から消費地まで簡便に礎石の搬入を行ったのではないかと考える。

筆者は、西方寺伝来礎石もまた、国分山で採取・加工・運漕され、官寺級寺院の塔に使用された一群のセットと推定する。礎石のサイズは表6のとおりで、これらは1号へそ石を心礎と考えた場合の四天柱礎、もしくは側柱礎としても遜色がない。心礎以外の塔礎石に円柱座・出柄形式や出柄形式を併用する寺院には、元興寺・西大寺・秋篠寺・春日御塔・山城国分寺・河内国分寺・丹波国分寺・淡路国分寺・但馬国分寺・紀伊国分寺・伊予国分寺・河内田辺廃寺・河内百済寺・山城馬場南遺跡（神雄寺）など多くの類例がある。他方、当該形式礎石を塔以外に使用する例は少なく、奈良時代にさかのぼると考えられる残存例は、東大寺（奈良県文化財保存事務所1967、奈良文化財研究所2003）・唐招提寺・備中国分尼寺・河内百済寺などでみられるに過ぎない。

4. 国昌寺の塔

（1） 塔の所要瓦とその時期

筆者が注目するのは、西方寺伝来礎石が三田川の川岸に放置されていたのではなく、台地の上に運び上げられていたという事実である。それは礎石の発注元、すなわち堂塔造営現場がこの台地上にあったことを示唆する。

台地上にあり、塔を必要とした古代寺院の候補の筆頭は前述した国昌寺である。同地には平安期の国分尼寺比定地も近接するが、こと塔に関しては国昌寺が唯一の需要を持っていたといえるだろう。

『日本紀略』によれば、近江国分僧寺は延暦4年（785）に焼失し、弘仁11年（820）になって、近江国は定額国昌寺に正式な国分寺格を与えるように望んだ。その際、本尊は新造、七重塔は修理を願い出て許されている⁽⁵⁾。この塔はいつ建てられたのだろうか。国昌寺が1号へそ石（実際はその代替品）と西方寺伝来礎石を使用して塔を建立したと仮定し、それがいずれの時期に整合するかを、採集された軒瓦をもとに考えてみたい。

当寺の比定地に関してはすでに先学の指摘（西田1989）があり、国分台地の東端、大津市光が丘町所在の雇用・能力開発機構滋賀センター付近であることはほぼ疑いない。寺域とされる台地一帯の北・東・南斜面からこれまで数種の軒瓦が採集・整理されており（平井1996）、それらは大きく三時期に分類できる。塔の所要瓦及び建設時期は、現状では以下の三者のいずれかと考えるしかない（図7）。

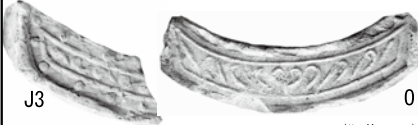
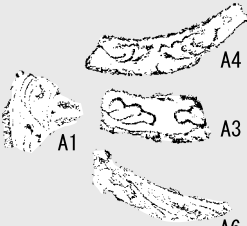
① 創建瓦の時期

7世紀末の複弁八葉軒丸瓦と偏行変形忍冬唐草文軒平瓦のセットである。これは国昌寺創建瓦としてこれまで紹介されてきたが、2011年の調査で、寺城南辺を画する台地斜面に少なくとも3基以上の窖窯を造って焼成し、製品を藤原宮へ運漕すると同時にそれを国昌寺にも使用しているこ



図6 国昌寺周辺地形図

瓦散布地 斜面

	① 創建瓦（7世紀末）	② 奈良時代（8世紀中～後半）修造瓦	③ 平安時代（9世紀前半）修造瓦
第1地点	 (肥後1933)	 (肥後1933)	 南郷田中窯生産品  (肥後1933)
第2・3地点	 (西田1989)	 近江国府系瓦屋生産品  (A4西田1989、A3小松、他は平井美典氏採集)	 (平井氏採集)

瓦型式のアルファベットは平井1996に準ずる（スケール 約1/6）

図7 国昌寺周辺採集軒瓦

とがほぼ確定した⁽⁶⁾。

藤原宮所要瓦を葺いていた可能性がある事、後に定額寺となり、さらには国分寺の代替寺院となっている事などからみても、国昌寺は当初から法会を修するに十分な規模の堂舎を持ち、創建塔を持っていたであろう（中井1991）。だが、当寺の檀越を考えた場合、国分を含む大津市南部には10基を越える群集墳はなく、当地、旧滋賀郡古市郷に蟠踞し、七重塔を備えるほどの寺院を建立するような有力氏族を明瞭には提示できない現状である。中央に名を馳せる百済王氏ですら、氏寺（河内百済寺）の塔心礎円柱座径は95cmに過ぎないし、その復元塔も五重塔を越えることはないことを考えると、創建時の国昌寺に七重塔が建立されたかどうか疑わしいと言わざるを得ない。

さらに、その心礎が円柱座・出柄形式であった可能性も低いと考える。なぜなら、白鳳期の塔心礎は多様なバリエーションを持つとはいえ、ほとんどが凹型であり、近江国の70ヶ所に及ぶ白鳳寺院のどこからも当該形式の礎石は発見されていない。また、全国的に俯瞰しても、この時期に、出柄のみならず円柱座まで造り出す塔心礎は、氏寺にはみられないのである。

② 飛雲文軒瓦の時期

当軒瓦は所在地不明の国府系瓦屋から供給されたと推定される。軒丸瓦A1・軒平瓦A6は8世紀中葉頃、政庁はじめ国府の創建期に使用された。軒平瓦A3・A4は、政庁に後続して、一斉に建設が進められた国府関連建物群に採用された瓦という位置付けである。また軒丸瓦Kは飛雲文にやや遅れる奈良時代後半のものという（平井2011）。

当期には、直線的に敷設された古代道を基軸として、国府関連施設が次々に勢多川兩岸に建設された。この道路は古代東山道の可能性があり、国昌寺伽藍域南端を限ると考えられる（小松2010）。また、古市郷周辺では、国守である藤原仲麻呂の主導で保良京建設という国家規模の工事が行われ、造東大寺司によって石山寺の増改築工事が集中的に行われた（福山1980）。国分寺のある紫香楽からは、国師の板屋が解体・搬入されるなど、大津市南部地域の瀬田や石山に政治・宗教的な重心が大きく移行する時期でもある。飛雲文軒瓦の出土は、願主である檀越に代わって、近江国が国昌寺の伽藍維持に関与し始めたことを示すのかもしれない。円柱座・出柄形式礎石の盛期にも整合し、当期が塔建立時期の有力な候補である。

③ 南郷田中瓦窯製品の時期

この瓦窯は国府から西南へ4kmのところに構築され、9世紀前半に操業を開始する（滋賀県教育委員会1994）。飛雲文焼成窯に半世紀あまり遅れる近江国官窯と考えられる。国昌寺が国分寺代替寺院となる時期に呼応するかのよう

に操業を開始し、国分台地一帯に展開する瓦葺建物と共に、官衙・官寺の修造・整備に使用されたと考えられる。国分寺格の移転という大きな転機に、新造塔の建立計画が持ち

（2）小結

採集資料を消去法で考えるしかない現状ではいかにもこころもとないが、ひとまず、②の時期、8世紀中葉から後半にかけて、国昌寺が新来形式の礎石を採用して七重塔を建立する歴史的な契機があったのではないかと考えておきたい。定額寺への指定や保良京の建設、やや遅れるが国分寺の焼失と直後の再建への模索などがその候補としてあげられよう。だが、現資料では判断は保留するしかない。一つの伽藍を立ち上げるためには膨大な数の瓦を使用したはずだが、残されている資料数はあまりに貧弱である。今後

5. 国分山製作礎石の供給先について

1号へそ石は石材採取場からさほど動かず放置されている。理由はまったく不明だが、代替品製作をもって国昌寺塔の建立は成ったと考えた。一方、2号へそ石は山を降ろされることなく製作途上で放棄されたかのようにみえる。出柄の規模は1号へそ石とほぼ同規模で、加工可能な最大径125cmの円柱座を造り出したと仮定すると、それは山城国分寺・河内国分寺などの塔心礎に匹敵する。国昌寺のための第三の予備心礎とすれば、あまりにも過剰な製作数という感はぬぐえず、これをどこへ供給しようとしたかは新たな謎として残る。この謎を解くため、出柄形式礎石の新資料を求めていたところ2011年末、大津市美崎町で造成工事中に3礎石が出土したとの報を得た。ここには壬申乱（672年）後、近江朝廷側の死者を埋葬したとの伝承地である「將軍塚」がある⁽⁷⁾。現状では南北13m・東西7m・高さ1mあまりの長方形の高まりであるが、工事掘削前には南北27m・東西7.5mほどの大規模な塚であった。頂部には小祠がまつられており、今、付近には縄目叩きのある平瓦片が散布している。

礎石は「將軍塚」東隣水田の地下約1.5mの深さから、天端をほぼ揃え、冑状に並んだかのように出土したという。石と石の間隔は50cm～1m弱で、ごく近接していたものようである。3個のうち1個が円柱座・出柄形式礎石である。現存長径165cm・短径110cm・高さ75cm、円柱座径80cm・高さ10cm、出柄径19cm・高さ3.5cmを測る（図8）。礎石は現況では大きく欠損しており、円柱座は完存しない。造成

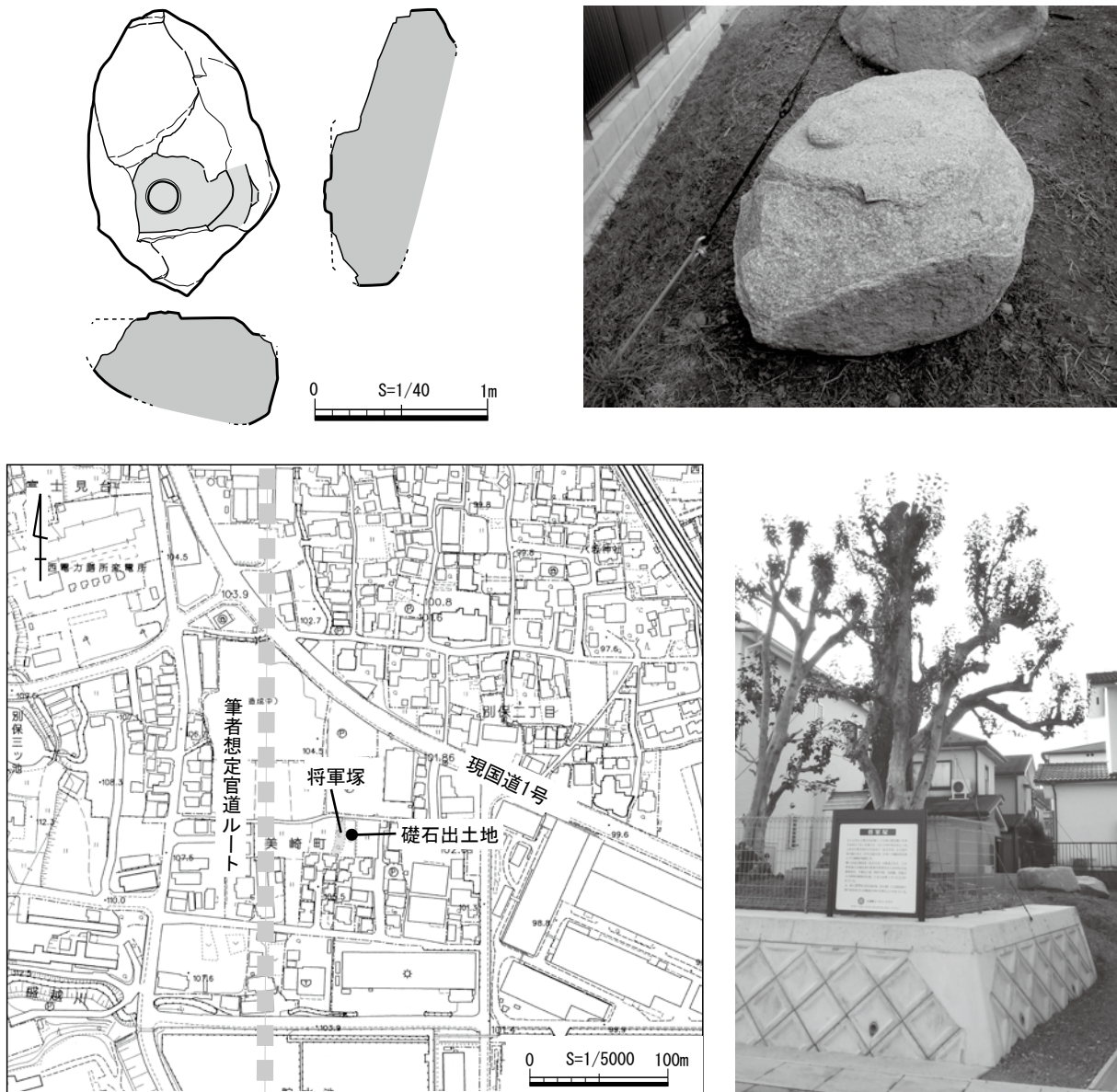


図8「将軍塚」出土礎石と周辺地形図

工事時の破損はないと聞くので、埋没時からすでに欠損品で、原位置を動いている可能性が強い。他の2個はこれとほぼ同規模の塊石で、特に加工はなされておらず、目立った欠損もない。ただし、うち1個には矢穴がうがたれており、割ろうとした痕跡がある。石材は全て石英斑岩である。石英斑岩脈が、この近辺では国分山にしか見られない以上、これらの礎石もそこからもたらされたと考えるのが自然であろう。国分山から「将軍塚」までは北方へ2.1kmの距離である（図3）。

「将軍塚」は筆者が想定する南北方向の古代官道（小松2010）から50mほどしか離れておらず、これまで全く知られていなかった寺院が、国昌寺と同様に、古代道に沿って美崎町周辺に営まれていた可能性が出てきた。

国分山製作礎石は、ひとり国昌寺のみならず、近隣の古代寺院にも供給されたのであろう。2号へそ石の供給予定先は、周辺に展開する、これら未知の古代寺院のひとつと

考えておきたい。

〔謝辞〕

本稿を成すにあたり以下の方々にご教示・ご指導をいただきました。わけても岩石鑑定に関して貴島氏のご教示に負うところが大きい。記してご厚意に謝すると共に、先輩諸氏の万卷の恩借の書にもお礼申し上げます。

青山 均・内田保之・上村 武・貴島嗣夫・白井弘幸・田中久雄・辻川哲朗・中島 正・濱田竜彦・平井美典・藤崎高志・前田清彦・山本 肇（敬称略・五十音順）

註

- （1） 貴島嗣夫氏のご教示による。
- （2） 紫香楽宮・国分寺・甲賀寺に関する研究史については榮原永遠男氏の整理がある（榮原2010a）。
- （3） 東面側柱礎南から2つ目の礎石。

- (4) 6は手水鉢に転用されており、中央に後世うがたれた円孔があく。石材はこれだけが黒雲母花崗岩で、産地は不明である。
- (5) 『日本紀略』弘仁十一年十一月庚申条
- (6) 軒丸瓦は「6278G」・「6278D」、軒平瓦は「6646A」・「6646Ba」が出土している（奈良文化財研究所1996）。田中久雄氏・青山均氏のご教示による。瓦窯が検出されていない北・東斜面にも軒平瓦が分布していることから、製品は国昌寺でも使用されたと思われる（図6）。
- (7) 『近江輿地志略』『志賀郡別保村』項記載の[大將軍]に該当するものと思われる。「社もなく敷地ありても境内の樹木をいらはず」など禁忌が書かれているが、壬申乱に関する記載は見えない（寒川1976）。

挿図・写真典拠

図3 京都府農林部耕地地課(1984)「表層地質図」『土地分類基本調査 京都東北部・京都東南部・水口』を改変。

図5-1～4 平井美典氏原図。

図5-5 肥後(1933)に拠る。

図5-7 柴田(1938)に拠る。

上記以外は筆者撮影・作図

文献（著者名、刊行機関名50音順、刊行年順）

石田茂作（1977）『仏教考古学論攷四 仏塔編』思文閣出版

岩井隆次（1982）『日本の木造塔跡 心礎集成とその分析』雄山閣

上原真人（2006）「寺院造営と生産」『シリーズ都市・建築・歴史 1 記念物建物の成立』（財）東京大学出版会

小笠原好彦（2005）『大仏造立の都 紫香楽宮』新泉社

梶原義実（2002）「最古の官営山寺・崇福寺（滋賀県）」『仏教芸術』265 毎日新聞社

春日神社（1973）『田邊廃寺跡発掘調査』

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（2010）『京都市文化財ブックス第24集 飛鳥白鳳の薨—京都市の古代寺院一』

京都府教育庁文化財保護課（1954）『重要文化財教王護国寺講堂修理工事報告書』

古代学協会・古代学研究所（1994）『平安京提要』角川書店

小松葉子（2010）「近江国滋賀郡勢田川西岸における古代道路の復元」『紀要』第23号 財団法人滋賀県文化財保護協会

榮原永遠男（2010a）『天平の都と大仏建立—紫香楽宮と甲賀寺』甲賀市教育委員会

榮原永遠男（2010b）「正倉院文書からみた甲賀寺」『律令国家史論集』塙書房

櫻井敏雄（2003）「創建東大寺伽藍の基本計画について」『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第1号 論集東大寺の歴史と

教学』東大寺

寒川辰清（1976）『近江輿地志略 全新註』弘文堂書店（享保19年(1734)初刊）

滋賀県教育委員会（1967）「史跡紫香楽宮跡・塔跡・關伽池跡発掘調査概要」『教育時報』19巻特集号

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1994）「南郷田中古墳および南郷田中瓦窯」『錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅷ』

柴田實（1938）「近江国分寺」『国分寺の研究』別冊 考古学研究会

田中重久（1941）「崇福寺址と梵釈寺址に関する研究」『史迹と美術』第16号—8 史迹・美術同攷会

中井真孝（1991）『日本古代仏教制度史の研究』法蔵館

奈良国立文化財研究所（1996）『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』

奈良文化財研究所（2003）『国宝東大寺転害門調査報告書』

奈良県教育委員会（1979）『国宝室生寺五重塔修理工事報告書』奈良県文化財保存事務所（1967）『国宝東大寺鐘樓修理工事報告書』

西田弘（1989）「国昌寺跡」『近江の古代寺院』真陽社

畑中英二（2004）「甲賀寺小考」『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第2号 論集東大寺創建前夜』

花谷浩（1997）「本薬師寺の発掘調査」『佛教芸術』235号 毎日新聞社

浜島正士（1984）「醍醐寺五重塔」『日本建築史基礎資料集成十一 塔婆Ⅰ』中央公論美術出版

林博通（1989）「甲賀寺跡」『近江の古代寺院』真陽社

肥後和男（1933）「滋賀郡石山町近江国分寺趾」『滋賀県史蹟調査報告』第5冊

平井美典（1996）「石山国分遺跡出土瓦の覚書」『紀要』第9号 財団法人滋賀県文化財保護協会

平井美典（2011）「飛雲文からみた近江国府の創建」『大国近江の壮麗な国府』滋賀県立安土城考古博物館・財団法人滋賀県文化財保護協会

福山敏男（1941）「梵釈寺について」『史迹と美術』第16号—1 史迹・美術同攷会

福山敏男（1980）「奈良時代に於ける石山寺の造営」『日本建築史の研究』綜芸社（原本1943刊行）

堀井三友（1956）『国分寺址之研究』中沢印刷

水野正好（1968）『史跡紫香楽宮跡保存施設事業報告書』滋賀県教育委員会

宮本長二郎（1983）「奈良時代における大安寺、西大寺の造営」『日本古寺美術全集6 西大寺と奈良の古寺』集英社

和田晴吾（2006）「石造物と石工」『列島の古代史5 専門技能と技術』岩波書店

（こまつ ようこ：調査補助員）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.25 2012.3

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage